局女郎
端女郎

原に居たる女郎に對して、ふらぬといふ心にて、散茶と異名せしとあり、然らば茶は袋に入れてふり出すに、散茶は粉に挽たる茶なれば、湯に放し入れるのみ、ふらぬといふ心なるべし、又むめ茶はその薄茶の濃きをうめるといふ心にて、散茶に對して、むめ茶と云たる成べし、是又さん茶に一段おとりたる物ぞかし、これにつき里人の口稱あれ共、正しからず、

〔一目千軒〕端女郎の事

太夫天神は、口の茶屋といふへは出ず、此女郎、晝ばかりは、端の茶屋にてあきなふ故、はし女郎といふ、夜は泊らず、廓の作法にて、夜泊りは揚屋而已に限りたるに、寶曆二申のとしより、口の茶屋にて泊はじまりし也、此價の品、奥にくはしく記す、此はし女郎といふもの、打かけはすれど、禿はつれず、宏かれども、松のくらゐにもまさるほどのはし女郎は、禿つれる也、則をくの名よせにて見るべし、此内往來にさしかけ傘はなし、此職に秀たるは天神と位階をのぼり、又太夫にも經あがる、太夫天神は云に及ばず、はし女郎までも襲著してゐる也、

局之事

局といふは、大内御局の下つかたの長屋に表して此號あり、直段は奥に記す、局女郎端女郎兼帶なり、

〔柳亭筆記四〕けちぎり

けちぎりは又けちとりともおなじ局女郎をいふなり、假契りと書くは假字なるべし、あるひはけちとばかりもいへり、又端青暖簾、柿暖簾、江戸にのみいへり、かきのれんは、多くのれんづら、きれをとるぼくとうなどもいへり、

青暖簾略○中　風流女大名、元祿の末印本大津柴屋町の事をいへる條に、是にて見えたる小家に青のうれんをかけたるは、端女郎の住み給ふ局とやらん云々、江戸咄貞享三年印本六の卷、吉原の條に、略○中大